

送序

味噌の味噌臭きは上味噌にあらず、学者の学者臭きは真の学者にあらずとは風来山人が至言なれど、星移り物かはり、授業改善にA I活用、内部質保証に助成金、コンプラ重視にFD研修、地域貢献に学内政治と、新しの臭味くつと加はり、いまやダイガクは明徳を明らかにするどころか、真顔で迷毒をまきちらして靦然たるところはなりぬ。池田一彦先生、こたびめでたく満期を迎へ、成城の教壇を去らんとせらる。その欠落や、惜しいかな。先生如上の毒氣に染まず走らず、若年は緑雨醒客が断簡零墨の骨を拾ひ、近年は知られざる明治戯作の佳篇称揚に執心。およそ明治二十年前後、文学のみならず経学政治医事物理に至るまでほとんど涉獵せざる書物なし。その精華すでに斎藤緑雨全集および二巻の著書に結実す。いづれもオリヂナルの想に出ざるものなく、他人の犢鼻褌を仮りし行論もさらにみえざるは、吉原の裏町にて産湯を浴び、篁村一葉が余香を身に沁ませたる先生ならではの芸当なるべし。また文字遣にきはめて厳。なかんづく著書たるや、表記字面のあまりの凝りやうに音を上げたる版元を、その多大なるついへのはてに、遂に倒産に追ひ込みしと云（根も葉もなき噂也）。いまだきの若手の、あしたに出でし論文一篇、夕べには立派な論文集となる速製成果主義とは霄壤の手間暇、けだし現代の奇書といはんか。さりとて筆は一本、箸は二本の戒め通り、いさ、か痲症やみの先生すら生活の瑣事には衆寡

敵せず心及ばず、いたる所にしくじりの逸話を残さる。性潔癖、義に篤く、酷薄を惡むに似合はず、日がな一日洒落軽口を叩かる、は、誤解のタネを自ら蒔くにひとし。されど人多くその善誨を解せざるこそ、先生一人醒め、世人皆酔へるあかしならずや。さんぬる健康診断の日、馴れぬバリウム呑んだる先生にはかに心地あしくなりて卒倒、そのまゝ病院に搬送せられしことあり。およそ健診会場から救急車のサイレン鳴らして出てゆく椿事など聞いたためし無く、戯作を地でゆくその言行は、まさに木乃伊とり木乃伊となるといふに当たれり。尤もこの俗諺、体を張つて学に殉ずる真の学者への褒辞とぞ。あゝ惜しいかな、寂しいかな、先生が不在。教授会席上、かの戯言をよそほへる箴言の甲高いお声も今よりは聞かれず、静かに議事は進むこと、ならん。近時ご病臥おほかるは案ぜらるゝも、願はくはまれに砧の地にお出まし下さらんことを。我らが心癒され、臭汚解毒の一助もがなといへば失礼千万、甚だご迷惑のやうなれど、毒をもつて毒を制すのならひ、先生が体中の病弊もまた、芬々たる臭氣に接して退散するかも知れずなど、マジメな助言いんや序言を後進 宮崎修多ホ、敬つて白す。